

東日本大震災被災地への支援

H23年4月5日

東京労災病院脳神経外科 加藤宏一

アントニオ猪木氏主催の被災地支援チームに、4 東病棟の金澤看護師とともに医療スタッフとして参加。

場所：福島県いわき市、宮城県東松島市

支援物質:ミネラルウォーター30000L、ダウンジャケット500着、タオル5000本、肌着など

都内から車で常磐自動車道を通り、いわき市役所へ向かう。

いわき市長と面会し被災地、避難所の状況を伺った後、避難所へ移動。

いわき市は海沿いが壊滅的な被害を受けた。放射線被曝30km圏内にも一部が含まれるのみで、自宅が残っている市民の生活は徐々に戻っているとのこと。

避難所①：江名地区、江名中学校体育館

水道は復旧せず、約90名が今も避難生活を続けている。

避難所②：藤原地区、小学校体育館

水道は復旧せず、約140名が避難。

高齢者も多く、1人1人に声をかけ体調を伺う。風邪や花粉症、持病の悪化はあるが重病の方は少なく、介助すれば起きて食事が可能な人が残っている。入院加療を要するレベルの人は、先週までに近隣や他県の病院にほぼ入院されたと。同行した青森の病院のスタッフもこの地区から肺炎患者を引き受けていると話していた。

薬が切れているという方に、持参したロキソニンや抗アレルギー薬、軟膏などを渡す。

寝てばかりいるという高齢者が多いため、散歩するなど体を動かすよう説明。

若い人達は昼間仕事に出て、夜に戻ってくる生活。残っている子供たちが集まって遊んでいるため、避難所内は予想したより明るい雰囲気になっていた。支援物質も全国から届き足りないものはない、感謝している、と言っていた。

他の避難所では下痢や集団感染が起こり、トイレなど衛生面の管理も気を付けているとのことだった。

問題は家族を失い辛いと朝から酒を飲んでいる人がいることで、阪神大震災でアルコール依存が増えたという教訓から、避難所では禁酒が絶対必要と説明した。

また、20歳前後のボランティアが数名いたが、避難所内ではあまりすることがないのに支給品を食べ避難所で寝る生活を続け、邪魔しに来ただけだと地元の人は怒っていた。トラブルの原因になっている様子。ボランティアを受け付けてない自治体も増えているという。

次に東北自動車道で宮城県東松島市へ移動。東松島市長と面会し、被害や生活の状況を説明いただき、被災地の案内をしていただく。東松島市はテレビで放送される機会が少なく支援も少ないと強く訴えていた。被災地はテレビで見るとより広範囲で絶望的だった。泥だらけの川の下に遺体が多数残っているが作業も進まない状態。

避難所2か所を訪問。

水道、電気のライフラインが残っている場所まで避難していた。

避難所には割りと体調がいい人が残っているとのことで、寝たきりの人はいなかった。ネットも自由に使え、支援物質も十分足りていると言っていた。家族が見つからないと泣きだす人もいたが、既に前向きになっている人が多かった。一か所に200名近く生活しており、衛生面や精神的なケアが重要と思われた。また、破壊された地区の撤去作業や仮設住宅の設置が急務と思われた。

猪木氏が東京では自粛ムードが強いという話をすると、どの避難所でも自粛はしないしてほしいと話されていた。

テレビの報道とは違い、避難所では子供たちが集まりゲームをし予想以上に明るい雰囲気であった。1日の限られた時間で、被災地区の病院の状況までは良く分からなかったが、患者を振り分け他県に搬送依頼した後は負担も軽くなっている様子であった。



[いわき市の被災地を訪問するアントニオ猪木](#)
(後方に写っているのが加藤医師)